［第一章］

１
私は早瀬真由美、３７歳の主婦です。
３年前に前夫を病で亡くし、半年前に再婚しました。
今の主人は、早瀬正雄という方で、４６歳。夫の・・・元上司です。
それまでには、本当に色々あったのですが、相談に乗って頂いたり、お世話になった男性で、一年程前には・・・男女の関係になりました。
今の主人はとても厳格で、男らしく、頼もしい男性です。
ただ前の主人との子供、つまり一人息子の長男は、まだ今の夫に懐かず、父としても認められない様で、それが今の私の悩みです。
それに最近、夜になると、二階の廊下でよく息子を見かけます。
あの子の部屋は一階です。そして二階には、私と夫の寝室があるのです。
そして今日の深夜も、いつの間にか息子が、一階から上がって来ていました。

２
「あら、どうしたの・・・そう・・・うん、母さんは今から寝る所よ」

３
年頃の若い視線が、私の胸元に突き刺さってきます。

４
「え？・・・ええ、そうよ、ブラは、してないの・・・だって寝る時は外さないと、苦しいでしょ？」

５
「ふふっ・・・はいはい、どうせ母さんのおっぱいは垂れてますよ・・・もぅ、意地悪ね」

６
私の乳房は大きく、ブラはＦかＧカップです。ただ３７歳にもなると、もう張りも失せ、ブラ無しではネグリジェの中で垂れ下がってしまいます。
それが透けて見えていたのか、息子は私の胸ばかりを凝視していました。
私は刺す様な視線から逃れる様に、話題を変えます。

７
「あ・・待って・・パジャマのボタン、掛け違えてるわよ。ほら、ちゃんと前向いて・・母さんが直してあげる」

８
私は、息子のボタンを掛け直しました。
その眼は、相変わらずしゃがんだ私の胸を睨み付けています。

９
「ここと・・・あ、ここも・・・んふッ・・はい、出来ました・・・じゃあ、母さんもう寝ますから。早く休んでね、明日も学校なんでしょ・・」

１０
息子にそう告げ、私は立ち上がります。
寝室のドアに手を掛け、息子に背を向けた時、また鋭い視線を感じました。
私は、寝室で待つ夫から命じられて、とても小さな赤いＴバックを穿いていたのを、忘れていたのです。きっとこれも透けて見えていたと思います。

１１
「それじゃ・・・おやすみなさい」

１２
私は、息子に背を向けたまま・・寝室に入りました。
８畳の洋間に置かれた、キングサイズのダブルベッド。
その横にあるドレッサーに、私は腰を掛けます。
セミロングの髪を束ねてうなじで結い上げる私の姿を、主人はベッドの上で観ていました。

１３
「はい・・・そうなんですか・・・ええ・・・でも、きっとあの子もまだ慣れていないだけだと思います･･･きっとその内にあなたの事を父親だと･･」

１４
自分に懐かない息子を、可愛げが無いと言い放つ夫。
そして息子もまた同じ様に、自分の父とは認めない。
そんな二人の感情に、私もまた悩んでいました。
やがて、夫は苛立ったかの様に私に「脱げ」と命じました。

１５
「はい、あなた・・・」

１６
私は立ち上がり、夫に背を向けると、眼の前で淡いブルーのネグリジェを脱ぎました。
息子よりずっと鋭い視線が、Ｔバックを穿いたお尻に突き刺さってきます。
「早くしろ」と言われ、私は全裸になりました。
主人は、ベッドから降りると仁王立ちとなり、その股間にそそり勃っているモノを誇示する様に、突き出してきます。
そして私の頭髪を掴むと、勃起した大きなペニスを・・・咥えさせたのです。

１７
「あ、おう！・・・ぐうッ・・・んふん！・・んぅう！・・うううッ・・・」

１８
夫にひざまずき、私は呻きながらも・・お口で奉仕します。
それは、夫が好むイマラチオで・・・いつも通りの行為でした。

１９
「んうッ・・・ん！・・んふ！・・・んぅううッ、んう！・・ぐう！」

２０
奉仕を続ける私を、夫は上から血走った眼で観ています。
夫はＳの気が強く、夫婦の営みでは私を性奴隷の様に責め立てます。
そういう性癖を持っていた事を、私は結婚してから初めて知ったのです。

２１
「ん！・・んふッ！・・くふ！・・ん！・・んっぐううッ・・はあ！」

２２
夫は、私の口から長いペニスを引き抜きました。
そして苦しそうに喘ぐ私を観て、またすぐにそれを咥えさせます。

２３
「おう！ンウウッ・・・あなたッ・・・んう！・・オウウッ・・んぐ！んふ！
うん！・・んぐ！・・ん！・・んぐう！・・・んっぐう！・・・っはあ！」

２４
再びペニスを引き抜かれ、私は荒い息を吐きました。
そして主人は私を引きずる様にベッドへ運び、押し倒しました。

２５
「あッ・・！はあッ・・・はあッ・・・あなた、待って・・・ああっ！」

２６
夫は、仰向けになった私の両足を掴み、一気に左右へ引き拡げます。
剃毛（ていもう）している股間の割れ目が、剥き出しになりました。

２７
「ああ、いや・・・そんなに、観ないで・・・」

２８
私の股間には陰毛がありません。それは主人の好みであり、いつも剃る様に命じられているからです。その恥ずかしい縦筋の割れ目に、夫の分厚い舌が・・・捩じ込まれます。

２９
「っは！・・・ああッ・・・あああ・・・だ、めッ・・あ、な、たッ・・」

３０
私の両足首を掴んだまま、主人は亀裂を舐め続けています。
やがてその舌は、一番敏感なクリトリスを・・弾く様に舐め上げるのです。

３１
「ああ！・・・ん！・・っくふ！・・・おねがい・・そこはッ・・だめ！・・ああ・・あはッ！・・・いや・・・んっふ・・・んう！・・くふ！」

３２
私は、湧き上がる快感に身体を震わせました。
ですが、ふと脳裏に息子の存在が浮かぶのです。
ひょっとして今も、寝室のドアの向こう側にいて、私達夫婦の営みに
聞き耳を立てているのでは・・・そんな様な気がしてなりませんでした。

３３
「はあッ、はあッ・・・あなた・・・待って・・ねえ・・あの子が起きてるの、まだ廊下にいるかも・・・だから今日は激しくしないで・・おねがい、あッ！」

３４
夫は、懇願する私の腰を掴むと、この身体を裏返す様に転がします。そしてベッドに這わせ、私のお尻を掲げ上げました。

３５
「ダメ！・・・あなたッ・・・！」

３６
「おう！、あっは！、んう！、あう！、おう！、おうッ！」

３７
私は、掲げたお尻を叩かれる度にのけぞり、叫び声を放ちました。
夫にはそういう性癖があり、まるで性奴隷の様に全裸の私を這わせて、お尻を平手で打ち叩くのです。若い女性よりも大人の女をそうするのが興奮する様で、お前のデカい尻を観ると折檻したくなると・・・よく言われます。

３８
「んう！・・・あは！・・・おう！・・・あう！・・あっは！・・うん！
　あう！、おう！、あな、たッ・・おねがい、もう・・おう！・・あっは！」

３９
私は・・この行為も息子に聞かれているのではと思うと、堪らない程の恥辱を感じました。でも没頭する主人は、息子の事など気にも掛けていないのです。それどころか、お尻を叩かれても感じている私を見抜くかの様に・・・濡れているあそこに・・・熱くなっているペニスを押し当ててきます。

４０
「・・・っは！・・・ああああ・・・はあッ、はあッ・・あなたッ・・」

４１
そして、大きなペニスの先端だけが、濡れた膣の中に埋め込まれました。

４２
「んう！・・っく！・・だ、め・・・ああああ・・・い、や・・・」

４３
主人は、いつも一旦ここで動きを止めるのです。そして次に、夫が聞いてくる言葉は決まっています。「どこに、何を入れて欲しい」と。

４４
「ああ・・・ああああ・・・オマンコ・・・真由美の、オマンコに・・・
あなたの・・大きな・・・おチンポを・・・入れて下さい・・ああああ！」

４５
言い終わると同時に、夫の長いペニスが後ろから押し込まれます。
私は震えながらそれを受け止め、枕に顔を押し付けました。そうしないと、大きな声が出てしまって、息子に・・気付かれるからです。

４６
「んう！・・・んぐ！・・・くふう！・・・ん！ん！・・んふう！」

４７
意地悪な夫は、私のお尻を後ろから激しく突き上げ、ワザと叫ばせようと責め立ててきます。私は歯を食い縛って、その責めに堪えるしかありません。

４８
「んぐう！んふ！・・うう！・・・んう！んう！・・おう！くふ！んう！
おう！・・おう！・・うん！・・ぐう！・・んふ！・・んふ！・・おう！」

４９
「んう！ん！・・おう！・・おう！・・ぐう！んう！・・おう！おう！
ぐう！・・んぐう！・・・っはあ！・・はあ！・・・ああ・・いやッ・・」

５０
私は枕から引き剥がされ、仰向けに転がされました。
夫は私の両足をその肩に担ぐと、体重を掛け、私の身体を折り曲げる様にして、長いペニスで貫いてきます。

５１
「あは！・・あああああッ！・・んう！・・おう！ぐう！・・ああ！ああ！
　ああ、あなた！・・あう！・・おねがいッ・・そんな、激しく、ああ！
　あは！・・いやあ！・・ああ！・・あう！・・ああ！やあ！ああ！あは！」

５２
首を振って堪える私とは裏腹に、太いペニスを咥え込んでいる私の性器は恥ずかしいくらいに濡れていて、いやらしい音と愛液を吐き出しています。
主人は、そんな私を容赦無く突き上げ、追い込んでいくのです。

５３
「いや！・・ああ！ああ！・・あは！・・っくう！・・んふ！・・ああ！
　ああ！ああ！・・ダメ！・・あなた！・・ああ！・・そんなにしちゃ、
　ダメッ・・・」

５４
そして私は、夫に屈服する様に・・いやらしい声を上げながらアクメに達します。廊下にまで、聞こえる様な声で。

５５
「ああ！イキそう・・オマンコ気持ちいいッ・・・オマンコッ・・オマンコイっちゃう！・・だめ！・・・ああ！・・だめ！・・あなた！・・・いや！・・いやあ！・・・イク！・・イクう！・・あああああぁああッ・・・！」

第二章

「その日私は、独りで遅いお風呂に入りました。
会社の宴会帰りだった酔った主人を寝かしつけ、お風呂から上がると・・・もう深夜の一時。
脱衣所で濡れた髪と身体を拭いた後、髪をアップに結い上げ、パンティだけを穿きました。
気付けばその下着は・・今夜それを穿く様に、主人から命じられていたものでした。三角形の布と、黒い紐だけで出来た様な、とても小さな下着。
主人が、黒いガーターと一緒に、通販で買ったものです。

私がこんな下着を穿いていると、あの息子が知ったら・・どう思うのでしょう。いやらしい母親だと、また軽蔑されるに違いありません。
観れば、小さな三角の股間部分は・・完全に透けていて・・割れ目がはっきり見えてしまっています。
でももう、今更穿き替えるのも億劫でした。
私はいつもの様にブラも着けず、そのまま薄いネグリジェだけをまとい、脱衣所の明かりを消しました。
そして・・・二階の寝室へ続く階段を上り、廊下へと出たのです・・」

「・・・きゃっ！ああ・・・びっくりしたぁ・・
　もう、母さんこう見えても恐がりなんだから・・ビックリさせないで」

「え・・だって、もうこんな夜中よ？廊下にいきなり立たれてたら、誰だって驚くじゃない・・・そーよ、息子でもそーなの、もぅ・・」

「ああ、お父さんはね・・もう寝ちゃったの・・今日は宴会があったみたい・・・そう、少し酔っぱらってたわ・・今は完全に熟睡ね・・んふッ」

「え・・・何・・・（少し狼狽気味に）あ・・そう？透け、てる？・・・いいの、胸くらい見えても（少し開き直る）恥ずかしい訳でもないし」

「そうよ・・・だって私の子供だもん、あなたは・・でしょ？・・・別に・・男と、女・・・じゃ・・ないんだから・・（少し動揺を隠し切れない様子で）」

「え・・良い匂い？・・そうね・・お風呂に入ったばかりだから・・・うん・・・あ、シャンプーじゃない？甘い匂いって・・・母さん、変えたの、この前」

「匂いを嗅ぎたいって・・・もぅ・・え？別に、照れてなんか、ないわ・・可愛いって・・・もう、コイツ・・親を舐めてるなぁ？（無理に微笑する）」

「あ、あ、ま、待って・・・え、本当に嗅ぐの？え・・あ・・くすぐったいッ・・あ、あ・・ねえ・・もう良いでしょ・・笑いそう・・そこ首筋だって・・ンッ・・ね、ダメよ、もう本当に・・・だって母さん笑ったらお父さん起きちゃうでしょ・・・ね、だか、らッ・・・ん！・・ん！あ、・・こらッ・・」

「ねえ待って・・近いって、何・・え・・？そうよ、どーせ大きなお尻です・・・あん！もぅ・・ちょっと・・はあッ、こら、ダメ・・え？・・キス・・って・・何云ってるの、母さんよ・・あ、待ってッ・・抱き寄せないでッ・・んう！」

「ンウウッ・・うん！・・ダメよッ何・・んう！・・んふ！・・ぐう！・・んんんッ・・・やめて、んん！・・ンッ、・・んふ！・・んっはあ！・・はあ！」

「はあッ、はあッ・・もう、何考えてるの？・・あなた、自分が何してるか分かってる？はあッ・・母親に、キスなんて・・・あ！ダメ、まッ・・んう！」

「だ、め！・・んふう！・・んう！・・や、め、（舌が入ってくる感じで）あふ！・・ングウウゥッ・・んふ！・・はあッ・・んう！・・んくう！」

「え・・・？待って・・何する気なの？・・だって・・ドアを開けてるじゃない・・この中は・・父さんがいるのよ・・え？・・・別にいいってどういう、こと？・・そうよ、寝てるけど・・でももし起きたら・・・あ！だめ！」

「・・ねえ、いい？聞いて・・（小さく溜め息）・・・どういうつもりか知らないけど・・ここは母さんと父さんの寝室よ・・ほら・・父さんが今起きたら、変な誤解するかもしれないでしょ？・・・え・・・だから変っていうのは・・あっ・・！」

「ネ、ネグリジェを・・引っ張らないで・・・ダメよ、母さん、この下・・・何も着てないんだから・・・ちょ、ちょっと・・離しなさい、あん！もう・・・あ、む、胸触っちゃダメ！・・え、え・・ウソ、ダメ！脱がさないで、ああ！」

「私は・・・主人が寝ている寝室へと連れ込まれました。
そして息子にネグリジェを捲り上げられ・・・そのまま脱がされてしまったのです。
夫が起きてしまう事が怖い私は、大声も出せず・・小さなパンティ一枚の裸体で息子に抱き締められました。
息子は、私のお尻を両手でわし掴むと、その感触を愉しむ様にぐねぐねと揉みしだき、何度も上下に揺すってきます。
私は・・思わず呻きそうになるのをこらえ、吐息だけで喘ぎました。
一体どうしてこうなってしまったのかは、分かりません。
ただ分かるのは・・今の息子は母親の私を、独りの女として観ていること・・それだけでした。

混乱する私を他所に、やがて息子の手は前に回り、私の乳房を掴むと、ゆっくりと・・揉み始めます。
指で乳首を摘まれたり、乳房全体を優しく握り締める様に愛撫され・・・
夫の寝ているベッドの真横で、私は歯を食い縛って堪えるしかありませんでした」

「く！・・ん・・・っはあッ・・・っは！・・はあッ・・ん、・・ん、やめなさいッ・・・もうダメよ・・おねがい・・・は！・・ああ・・あああ・・」

「え・・何・・ダメ！・・そんなこと、出来る訳ないでしょ・・口だけって・・お口でもそれは・・あ、何してるの・・脱がないで、ダメよ！・・あ！・・いや！・・ん！・・おぐ！・ぐ！・・んふう！」

「んう！・・ぐう！・・んぅううう！・・くふ！・・・んふ！・・っはあ！・・はあ！・・あ！・・んう！おぐう！・・んぐ！、ん！・・んっふ！・・んふ！ンウウゥウッ・・ん・ぐ！・・んっはあ！・・はあ！・・はあッ・・・え・・ベッドに行こうって・・・・今お口で・・したでしょ・・あ！・・だめ！」

「待って、父さんが・・・んう！（キスされる）ん、んふッ・・んう・・んふ！・・だ、め・・ンウッ・・んふ、・・くふうッ・・・っはあ！はあ！・・あッ！・・ねえ、どうしてこんなことッ・・あ！・・・はあッ・・首、舐めないでッ・・」

「だって、くすぐったいッ・・ん！・・ちがうわ・・感じて、なんかッ・・あ！・・ああ！・・・もう本当にやめて・・お父さんが起きるわ・・あ！・・ンッ・・っふ・・んうッ・・・え・・・下着がいやらしい・・？・・だって・・・あ！・・っく、ふ！・・そんな所・・舐め、ないで・・う！・・・んん・・んっくうッ・・・ンンンンッ」

「はあ、はあ、んっ・・くう！・・くふ！・・ああ・・あああッ・・んふッ・・んっふう！・・ああ！・・っは！・・はあッ、はあッ・・え・・何・・？・・ダメ、四つん這いなんて・・・あ、待って・・いやッ！・・ああっ・・」

「おう！（叩かれて思わず声を上げ、口を手で塞ぐ）・・っふ！・・ん、ンッ・・何、する、の・・・（震え声）・・やめて・・・父さんが起きるわ、お尻、叩かないで・・おねがい・・・・あ！・・（舐められる音）・・クウッ・・んふ！・・あ、あ、・・・はあッ・・はあッ・・ああッ・・あああああッ・・」

「あ！・・ダメ！・・はあっ、それだけはダメ！・・はあっ・・本当にダメよ、やめ、あ！・・・・っく！・・・ん！・・くっふぅううッ・・」

「あ！・・あ！・・・くふ！・・ん！・・んふ！・・ああ！・・ああ！・・
はあ！・・ああ！・・ああ！・・あああああ！・・んふうぅううッ・・
あは！あは！・・ああ！ああ！・・やあ！んぐ！・・くう！んう！・・
あああああ！・・・んぅううッ・・あああああッ・・・だ、めぇええええッ・・・」

「んう！・んう！・・ああ！・くう！・・ああああああっ・・ああああ！
いやあっ・・いやあっ・・・ああああ！・・あはあああああ！・・・ああああ！」

「ああ、ダメ！・・もうっ・・ああああ！・・おね、がいっ、もうっ・・あ
あ！・・・いや、イクっ・・ああああ！ダメ！・・ああああ！・・イ、くぅっ・・！
・・っは！・・・あはあああああぁっ・・・！」

「っはあ！・・はあっ！・・はあっ！・・はあ・・はあ・・・はあ・・・
ねえ・・はあ・・母さんの・・・はあ・・・母さんの中に、出したの・・？
・　・・・バカ・・・・はあ・・え・・・言わないわ・・・誰にも・・・
　言える訳・・ないじゃない・・だから、いい？・・・もう・・こんなこと・・
　あ・・・え・・・大きく、なったの？・・ウソ・・だって今・・・え・・
　ダメよもう・・あ・・だ、めッ・・・んっ・・んふうっ・・こら、ダメだ
　って、ん！・・・ンフゥウウッ・・・んう・・んふううっ・・・」